



蜀川初稿

地

中村俊定文庫
文庫 18
338
2





夜話

去るのきき何、
 ちひさの秋ハ竹扉を新く
 けし川乃や年四明うけし
 暑をぬく紙信花を芦乃
 更のおき石山り美く
 時雨降ぬかし涼り

されを發河よりさくふくむる人くはりく
 又竹田の譯り杖をもむ其地也やきん家のあり
 中長法師の生産の地なりり然し彼里の丸人
 城を氏何り——田中り一神堂と銘ん宗長侯の
 古ふ名をとむるハ寧坊戸りて朽風り其法の
 ちる魚さくあり名ハ何ふ大井とて製る垣とせり
 耳はふありとせり——と家志はるくの困患とせり
 中々故破りとも捨るべきものなりてしるにふり

何々々々々々画舫樓より杞震をうけり
吐月あり物々々々魚明光ありと西を岡山
かきハナハナ月心人の故郷をうけり

黃太

宗長の傳や傳くきこく
新坊ふすね磐乃月代
入船と出船乃揮乃船
重臣はとけくさるのふくみ

魚明

雲金月寸太明金雲

物云

五金

花明

太

十

月

全

雲

下

金雲明月太花明

かくれ里ふう都もききうに
宗音まよふ鉢もまよふ
あゝ粥まきり下菜もききう
既りふう白う明ききう
八景をまよふ波り生消
をい他人りききう
昔押う風乃ききう
一条下町乃ききう

花月太明雲全紀

下

ウ

捨棄れ新もかつりききう
節もその風の吹りききう
八朝もききう
紅路の夕日乃ききう
いとほしききう
二階り既乃ききう
山もそ不易ききう
かきり従来乃ききう

明太月花全雲
批筆

附録瓢中吟

この瓢（か）や後の神（かみ）を月
かきけや星（ほし）も世（よ）を掃（はら）ふ
阿（あ）摩（も）の重（おも）きふやまはのふ
伽（が）羅（ら）の火（か）のぬきや不（ふ）如（にょ）婦（ぶ）
言（い）ふに化（か）れふふふと（と）
虫（むし）なくや振（ふ）り（ふ）るふの神（かみ）
涼（すず）しき阿（あ）摩（も）の重（おも）きふやまはのふ
楚（そ）水（すい）

柳肘

完子

金沙

吏流

夢把

梅動

下

さほまゐのふ（か）や（か）
吹（ふ）き（か）く白（しろ）き（か）
かし（か）や（か）ま（か）ま（か）ま（か）
咲（さ）く（か）く（か）く（か）く（か）
出（い）で（か）く（か）く（か）く（か）
玉（たま）味（あじ）の口（くち）
桃（もも）灯（あかり）の底（そこ）
山（やま）一（ひと）ふ（ふ）り（ふ）り（ふ）り（ふ）り

吏仙

吐月

物雲

這平

飲河

自來

陽馬

花上

五

名月や雪の芭蕉は秋より
一盞のかえりふあり十三夜
百生の松と拍子や鈴さる
ふ金のぬの衣くや飛ゆる
川根——くちや渡川大和川
蘭の香や物うきいし月夜
新屋の二日月のいとあは
川上ふ秋と秋とく川根ふ

鶴之 夢旦 棧石 六渡 芦一 如雷 夜光 桃鏡

名月やきふよ——くぬく
葉の香や机より深氏ものり
明星の流るふ——かき
あ——ちゅうり新——おの月又
梅うりり昼と物思ふほる
祢るん會やあふなき夜道の村木
と船館や鼓り波の下も
と即ちさといふ川心の瓢うふ

魚明 友顔 白羽 鷺丸 桂舎 野きく 花明 眠江

春藤のやつ連てんぬしそ外
名月や仲一節りぬきく
新に地り落く物ふ一凡の障
赤き垢掃く僧いとるるま
山吹や水吸るる鼻一凡く
舟行く出拂ふ名も何千哉
法をや日のあと又なる
年暮るぬきく

山奴
玉斧
馬三
五金
米城
凉花
赤羽
牛東

驚れく地をえくもくちくふ
いと新に日あや萩乃露
誓の目紅足折く初まうふ
夕昔り名とに足しれあし
手拍く紙昭の指る重足
推まある僧あり花の三歌仙
おほろおや咲ぬ極りまき
ま柳やるるまの角いろ

擣衣
左蘭
慎車
南羅
折山
善木
社長
全
菱菴

七人 斧石
吏登

吏登

夢太 東灣 素紅 砂川 山紫

路上御風為人丸水春字史曉呂風杜濬

紙いふやいふも使ふ
陽そや入り木と燃えり
まぬや店水語り明る
細曳の二見一海月おる
月ひとつ蓮さくらに
一葉は春を告ぐ柳の
うき叶や片足踏乃
ゆふ〜^{宇塔}車土時や

三楚
荊雨
文翠
号江
鷗浴
睡亟
鳴皋
虎里

津候よりかゝる〜
道々をい〜く〜清水哉
免つ〜交葉物いつ花
壺といふ〜月乃花
十六おや灯ひとつ
梅香も尋ねられつ
梅らむも家新も
一も〜と詠〜

箕山
蛙水
芦水
求光
舎筏
桃壺
翠羽
浮蓮

花のよみ花とも葉とも枯れぬ

竹道

洛三十三間堂

花の盛目もあつたふり

藤文

清くも濃くもあつた公

蓼太

あつたふりもあつたふり

嵐亭

セキやあつたふり

竹平

まふちやあつたふり

東志

昔今ぬ不破のふり

中島

下

風雪も花も入るもあつたふり

蓼子

残雪もあつたふり

柳花

炭竈や夕暮月のふり

残馬

きうくいつくもあつたふり

班象

およばあつたふり

白木

梅の及雪もあつたふり

柳凡

桃咲や桜もあつたふり

白牛

世の中三日月ぬるふり

蓼太

改

王下

升り午のとき
江も輪忠新拾ふ
何事も一物やそ
けり詩歌連作
ぬゑを形名
唯人の起意

安ふ四明子
その是れ
彼蜀川の名
石易強とめ
流り
おの道
く
机より

胸中 小画 残るすといふも
 能 便 あり 厚く なる 予 小
 政 せらる 求 たり 何 ぞ 之
 流 きの 米 長き 糸 魚 の 身
 ろ こと 吐 月 窓 の ぬ
 吐 月 窓 の 糸 糸 糸 糸

蜀川植話下巻終



書林

通油町

原原屋太兵衛板

昭和九年一月より 校舎

杉本又彦市信記字之

後室町



